

『悠遊』の題字

松浦 俊博

十年ほど前に、IさんからOBペンへの入会勧誘の封書をいただいた際に、『悠遊』19号と20号が同封してあった。題字の「悠遊」は毛筆の字に見えたが、薄い色でその下にある絵の濃い色に比べて弱々しく消え入りそうだった。よく見ると「悠」と「遊」の色も大きさも違い、字形も違い、しかも「悠」のみ掠れている。二つの字は異なる作者が異なる筆で異なる紙に書いたものを並べて貼り付けたものであり、一体感は全くない。「書」ではなく「絵」として配置したものだと感じ、違和感を拭えなかった。

自分が投稿するようになった21号以降に、『悠遊』を知り合いに渡そうかと思うこともあった。しかし、知り合いには書道をたしなむ者もおり、彼らがこの題字を見たら何と思うだろうかと考えると渡すことができなかった。

水墨画では画の中に書が調和をもって配置されることもある。例えば東晋時代の書家王羲之が主催した宴は「蘭亭曲水宴らんていいきまぐすいえんず」として多くの画家が画と書を調和させて描いている。参加した名士たちが書いた詩に王羲之が付けた序文『蘭亭序』は書の分野では有名である。『悠遊』の表紙でも、絵と書はそれぞれ独立し、かつ調和のとれている事が美しいと思えた。

そうこうするうちに、Sさんに強く誘われて26号の編集委員になった。編集の最後の段階で題字について思っていることを話したところ、「そうだね。この際、変えてみよう」と賛意を示された。27号から「書」としての「字」を選んだ。ちょうど表紙絵がKさんの素晴らしい作品で、これとバランスがとれるようにサイズやスペースなどの配置を工夫した。

一方、当時の表紙絵には既存データから細かい額縁を選んで画像処理で取り付けることが多かった。Kさんの絵に額縁をつけると絵を締め付ける感じがした。「絵に迫力があれば額縁は無い方が良い」ということで編集委員全員が一致した。かくして27号の表紙絵が誕生した。

絵と書のバランスがとれた表紙は安心して見られる。

